

第九章 改革と創造

弁護士会

弁護士という職業は、台湾では一般になじみの薄い、雲の上の業界であった。弁護士の需要はあるが、国家試験の狭き門は、有志の参入を拒んできた。軍事法官から弁護士になるという近道もあるが、いずれにしても社会全体の需要は満たせない。代書業が台湾でこれだけの隆盛を見たのは、弁護士がやるべきことの多くの部分を、代書人が肩代わりしてきたという事情がある。

弁護士、裁判官は司法防衛線上の守護者。ところがこの台湾では、社会的にはほとんど重視されていない。人数が少ないというのもあるが、弁護士同士の団結がなく、一つの団体として勢力を張ることができないという事情もある。もちろんその根底には、権力者の政策上の配慮がある。

一九四九年、国民党政府が台湾にやって来た。もともと体質的に健康とは言い難いこの党が、海峡を渡って、わずかの間に体制を整えることは至難の業であった。ともかくも混乱から抜け出して、一時の安定をはかりたい。こうして毎日、根も葉もない法令が実行に移されて行った。権力を握ったのはみな軍人上がり、文官もない訳ではなかったが、法治の観念を理解している者は稀。それになにより当時の状態で法治の暇はない、局面の收拾が先決と考えていた国民党は、法律家を危険分子のごとく見なして、弾圧を加えた。そしてこれが爾来、台湾三十年の不変の局面になってしまったのである。

頭を抑えつけられた法曹界には優秀な人材も入って来ないが、「奇蹟のような経済成長」を自慢する台湾の、経済界を支える人材は輩出している。銀行、商社そして各種企業と、学問を活かす機会は

いくらでもあるから、大学入試にも、経済関係の学部に学生が集まる。

それにひきかえ法科には、書物に埋もれ、試験に追われる苦渋に満ちたイメージがある。一九八九年以前、弁護士試験の採用枠は毎年二、三十人。合格率は一%前後。苦節十年という老受験生も少ない。就職と試験の間をさまよい、青春の歳月を受験参考書の山に一分一秒と費やしていく。こんな「お先真っ暗」な学科に、魅力を感じる学生がどれほどいるだろう。

このような「法律環境」の中で、敏生の弁護士稼業も三十年を越えた。幸い、長男の志剛が彼の衣鉢を継いで、輔仁大学の法科に進んでくれた。志剛は語学が得意で、尉官候補生時代は英文教官を務めたほどだ。

志剛や所員たちの「受験戦争」から、敏生は、弁護士を志す者の辛酸を痛切に感じている。一九八八年、受験者二一四二人中採用者は十六人。合格率は〇・七五%に落ちた。この年、台湾大学法科卒業生の一人が、度重なる落第に、世をはかなんで投身自殺した。一九八九年、採用者は二八八人に激増。その後は一九九〇年二九〇人、一九九一年三六三人と、合格率はほぼ一〇%のレベルを維持している。

加えて、与野党政治家の中に法科出身者がめだつて増えてきたことが、法律人気を高める結果となり、統一試験の採用基準でも、台湾大学で法科が国際貿易学科を抜いてトップに躍進。四十年あまりの「曇天」を経て、ようやく日の目を見た。

台湾社会を覆った改革の波は、法曹界ばかりでなく、あらゆる分野に及んで、四十年の鬱積を晴らすように揺れ動いていたが、ここにもう一つ、長年病床に呻吟する老組織があった。台湾登録弁護士の七〇%を占める台北弁護士会。荒療治が必要だった。

一九八九年末、敏生は万国法律事務所の陳傳岳弁護士から、「若い連中があなたに出てほしいと言っている。」という電話を受けたが、もともと弁護士会をばかにしていた敏生は、聞き流していた。前回の選挙は一九八六年。従来のように軍事法官出身の軍法派が勝利を制したが、選挙の経緯に疑惑がもたれた。

あれは一九八六年十一月二十九日の年次大会。最初の疑惑は出席受付の締切時間。主席は十時四十分に関会を宣言したにもかかわらず、「都合によつて」十一時まで延期された。さらに、受付締切後に発表された出席者の人数と開票後の票数が食い違うという問題もあった。

極め付けは開票のやり方。開票の途中で「大局は決まった」と判断した軍法派。開票を中断して休憩したいと言い出したのである。これには敵対する司法試験出身の司試派が抗議。両者譲らず、結局、社会局白局長の仲介で、投票箱を来来大飯店の金庫に預け、翌日開票することになった。

翌日、開票時間の九時をだいぶ回ったところに軍法派が現われて封印を切る。開票の結果は意外にも軍法派の勝利。途中、司試派の弁護士が慎重な開票を要求、逆に軍法派から「票どろぼう」の嫌疑をかけられ、警察沙汰になるという一場面もあった。

司試派は選挙の無効と再選挙を要求したが、軍法派のためにもみ消された。疑惑続きの選挙はこうして幕を閉じたのである。この選挙には敏生はまったく絡んでいない。

弁護士会とは没交渉の敏生だが、台大同窓の弁護士親睦会などには、積極的に参加していた。一九八一年に敏生、朱昭勳、張政雄の三人が音頭をとり、開業十数年から二十年以上の弁護士を集めて発足した北区台大弁護士親睦会で、敏生は総幹事を務めていた。総幹事はのち、朱昭勳、張政雄、曾宗廷、陳傳岳、張迺良、林誠一、頼浩敏、李忠雄、蔡調彰、陳世雄などに受け継がれている。経歴十年、

二十年、三十年を過ぎた弁護士には、それぞれ銅、銀、金の楯が贈られる。弁護士生涯の記念碑として重視された。

一九八九年十一月、とうに開催されるはずの選挙がなかなか行われぬ。若い弁護士たちは心配しだした。いずれにしても用意はしておかなければ。

周弘憲、黄瑞明、顧立雄といった若い弁護士が陳傳岳、黄柏夫などを訪ね、計略を練った。「林敏生を引っぱり出せば勝てる。」と提案したのは黄柏夫。陳傳岳はさっそく敏生に電話をかける。

敏生は陳傳岳、顧立雄、周弘憲、黄瑞明、蘇煥智、廖学興と食事をもにした。敏生に随行して同席した者たちは一様に、「泥沼に足をつっこむことはない。」と進言。敏生はこの熱心な申し出を断わった。

敏生を選んだにはそれなりの理由がある。第一に敏生はベテラン弁護士。第二に弁護士界で名が通っている。第三に事務所の規模が大きく、人力物力ともに問題がない。第四に気迫があつて組織力に富んでいる。敏生に欠けていたのは、選挙に対する興味だけだった。陳傳岳はしかたなく別の人選を検討したが、結局また敏生のところに戻ってきた。懇請を受けてやむなく敏生は、「作業チームの召集人」という資格で引き受けることにした。TIPLOの九階で計略を練り始めた彼ら。「召集人」も、やりだすと止まらない性格だ。

敏生は蕭艷珍に、弁護士会の過去の資料を整理させた。主要人物のプロフィール、背景など逐一分析して敏生は、「敵も一枚岩じゃない」と勝算をたてた。「出馬」を決意したのはそれからである。

敏生は選挙のベテラン載孝任を顧問に招き、事務所内に準備会を設立。「文連団」を組織して、本格的な選挙戦に入った。

準備会は会議を重ねるごとに議論百出。さまざまな提案が出された。この間、台北三信理事主席で企業管理に一家言ある林誠一弁護士が積極的な協力を約してくれた。

宣伝ビラが二日に一枚の調子で次々と出された。「弁護士会を救おう」、「正義のために最良の選択を」といったスローガンも掲げられた。文連団は「団結と革新」のイメージを打ち出し、意表をつく戦略を実行。理事二十一名、監事七名、全連会代表十名計三十八名の候補者が、文連団の強力な推薦のもと、これまでとは一味違う選挙戦を展開した。

出席する弁護士は一人一票の委任票を受けることができる。ただし委任票の数は出席者全員の三分の一を越えてはいけない。この三分の一の有効票を決めるのは先着順。よって選挙当日の行列が重要になる。敏生にも、陳長文弁護士から預かった委任票がある。

候補者の態度が徹底せず、両陣営に二股かけることのないよう敏生は、「私の獲得票を上回ったものは罰金」と、厳しい姿勢を示した。「対立を作り出すやり方だ。」と不満の意見もあったが、「対立しなかったら、支持しようにも、どちらを支持してよいか分からないだろう！」と軽くないなした。

選挙会場は中華路にある国軍英雄館に決まった。軍人と元軍人しか住めない会館だったから、これは明らかに選挙当日の委任票確保が目的である。見え透いたやり方は糾弾の的となったが、軍法派は聞く耳をもたなかった。

選挙前夜、敏生は文連団の最終ミーティングに臨んだ。席上、「われわれの推薦する三十八名の候補者は全員当選。最低得票者でも、軍法派の最高得票者を上回る。」と予言。若い弁護士には心配そうな表情も浮かんだが、「私の船に乗れば問題なし。安心したまえ！」と胸をたたいた。

新聞紙上は「双方の弁護士は選挙前夜に綿密な選挙対策。『票割』作業は一般の公職選挙と変わら

ない。」と報道している。

一九九〇年四月八日の日曜日。台北市民がまだ甘い夢をむさぼっている頃、台北弁護士会の年次大会がひそかに始まるうとしていた。午前五時。国軍英雄館の前はすでに長蛇の列。

当時、台北弁護士会の登録弁護士は一一六八名。報道関係者の予想によれば、軍法派は四〇〇名。司試派もだいたい同じ数字。残りは弁護士会に興味を持っていない弁護士、いわば浮動票である。形勢はほぼ互角。

相手側の召集人葉潜昭は会場で敏生を見かけると、「数日前に宴会をやったそうだが、なぜ私を呼ばなかったんだ？」。敏生が「今は敵同士。呼べるわけがないだろう。私の宣伝文句は読んだか？」と笑って答えると、「ああ、あの紙屑か。」と葉潜昭。敏生は黙ったまま「その紙屑一枚がお前の致命傷になるんだ。」の一言を飲み込んだ。

十時ちようど。会議が始まった。

主席団は双方の代表七名と担当常務理事の林憲同弁護士の計十五名。七六〇人の弁護士が出席もしくは委任出席の手續を終えた。軍法派は約三〇〇人。司試派は四五〇人を越えた。

選挙会場は蜂の巣をつついたような騒ぎ。昼食の間も選挙は継続。開票の用意ができたのは午後二時。

そして開票。基本票を開けた時点で、司試派の優勢はすぐ確定した。司試派三〇〇票に対し軍法派はわずか一〇〇票あまり。軍法派の面々から笑顔が消えた。開票終了。祝福の言葉もなく、軍法派は悄然と退席した。

三十八対〇。理事、監事、代表など三十八人の候補者はすべて当選。軍法派は完敗した。こうして

台北弁護士会は、四十年続いた壟断の局面を打ち破る。「歴史を書き換えた」激しい選挙戦だった。

「文連団」はこの段階的な任務を終え、召集人敏生から解散が宣言された。改革を志すものなら党派を超えて手を繋ごう、というのが敏生の考え。

新たに選出された役員たちには、「弁護士のイメージチェンジ」と「社会活動への参加」という新しい期待が寄せられた。

ヨードン

四月二十日、改選後初の弁護士会理事会で満場一致、第十九期理事長に選ばれた敏生は、その場で「着実穏健に新局面を切り開こう」と題する演説を行っている。敏生はその中で、理事会前任者たちの協力に感謝の辞を述べている。これは皮肉ではなく、軍法派が選挙を実施しなかったならば、文連団による弁護士会の改革も出来なかったという敏生なりの論法である。敏生は最後に、「……弁護士会は社会の良心と道徳理念を結集させた職業集団であるから、独立自主は絶対のこと。あらゆる党派と利益団体から超然としていなければならぬ。……私と理事、監事全員は、互いに協力、力を尽くして、選挙の公約を実現し、弁護士会に新世紀の局面を切り開くことを、改めて約束する。」と結んだ。